

秋田大学医短紀要 6 : 77-85, 1998.

看護学生の卒業時の看護に対するイメージについて  
— 学生の学校種別の比較 —

石井 範子\* 平元 泉\* 志賀 令明\*\*  
堀井 雅美\*\*\* 平 むつ子\*\*\*\* 宮本 規久子\*\*\*\*\*

Students' Image on Nursing in Just Before the Graduation:  
A Comparative Study of Nursing Educational Institution

Noriko ISHII\* Izumi HIRAMOTO\* Noriaki SHIGA\*\* Masami HORII\*\*\*  
Mutsuko TAIRA\*\*\*\* Kikuko MIYAMOTO\*\*\*\*\*

I. はじめに

人の職業に対する理解の仕方や態度を把握する方法の一つにイメージ測定があり、学生や社会人などの各種の職業に対するイメージの調査については多くの報告がなされている。ポウルディング, K. E は「行動はイメージに依存し、イメージが変わればそれに応じた行動をするようになる」と述べている<sup>1)</sup>。看護職を目指して入学した学生においても、看護に対するイメージは様々であるが、入学後の専門教育により、変容が図られることも予測されることである。

看護教育は大学・短期大学・専修学校の3年課程および2年課程など何種類かの教育機関において実施されている。とくに近年、大学化や

短期大学化が急速に進められ、体系的な看護教育や看護職者の高学歴化などが図られるようになってきた。

これまで、大学や短期大学で学ぶ看護学生は専修学校生に比べ、看護職志向の意識が明確でない等の報告がいくつかあるが<sup>2)3)4)</sup>、大学生や短期大学生と専修学校生との看護に対する意識・態度を比較した最近(1990年代)の研究は少ない。今回、卒業期にある看護系短期大学生(以下、短大生)と専修学校生の看護に対するイメージを調査し、看護学生の看護に対する意識や態度について学校種別の比較検討を行った。尚、“看護に対するイメージ”とは、ここでは、看護という職業に対するイメージ、および看護

秋田大学医療技術短期大学部

\*看護学科

\*\*総合基礎教育

\*\*\*秋田県福祉保健部医務薬事課

\*\*\*\*秋田県立衛生看護学院

\*\*\*\*\*中通高等看護学院

Key Words: Students of Nursing

Image on Nursing

Educational Institution

職者に対するイメージの双方を意味する語として用いることとする。

## II. 研究方法

1) 対象：A大学医療技術短期大学部看護学科3年生77名（以下、短3年とする）、B看護学院3年課程3年生52名（以下、専修3年とする）、C看護学院2年課程2年生42名（以下、専修2年とする）。

2) 調査方法：イメージ測定はSD法により7段階評定法で行った。意味尺度の構成には20の形容詞対を設定した<sup>5)</sup>。調査用紙には、入学時に比べての主観的なイメージの変化の有無とその内容についての記述欄も設けた。

3) 調査は全ての臨床実習および講義が終了した11月下旬から2月上旬にかけて一斉回答方式により実施した。

4) 分析方法：①SD法によるイメージ測定は各尺度で好意度が大き評定値が小になるように1～7点で評定し、一元配置分散分析・t検定により学校種別の平均評定値を比較した。②20尺度について主因子法バリマックス回転により因子分析を行い因子を抽出した。さらに、一元配置分散分析・t検定により因子得点の学校種別の比較を行った。③看護に対するイメージの学生自身の主観的な変化について記述された内容の分類や、変化の仕方を学校種別に比較した。

## III. 結果

### 1. 看護に対するイメージの学校種別の比較

イメージプロフィールは3校とも「自由な」以外のすべての項目で3.9以下の左寄りの好意的イメージであった。短3年が最も左寄りであり、専修2年が他の2校よりも右寄りであった。15項目で有意差がみられ、「安定した」で専修2年が、「労の多い」で専修2年・3年が短3年より有意に好意的であった以外は、短3年が「親しみやすい」・「スマートな」等の3項目で他の2校と、「面白い」・「好きな」等の4項目で専修3年と、「活気のある」・「若々しい」等の7項目で専修2年と、有意差がみられた（図

1）（表1）。

### 2. 看護に対するイメージの因子構造と因子得点の比較

累積寄与率57.8%で5因子が抽出され命名した。第1因子は、なりたい・好きな・望みのある等の6項目からなる「看護就労希望」、第2因子は、責任感の強い・重要な・価値のある等の3項目からなる「看護の価値」、第3因子は、特色のある・知的な等の4項目からなる「看護の特性」、第4因子は、明るい・若々しい等の4項目からなる「看護婦の外観」、第5因子は、やさしい・温かい等の3項目からなる「看護婦の性格」であった（表2）。

因子得点の比較では、看護の価値因子・看護の外観因子・看護婦の性格因子で有意差がみられた。看護の価値因子では専修2年が他の2校より得点が高かった（ $P < 0.05$ ）。看護の外観因子は専修2年が短3年より高く（ $P < 0.01$ ）、看護婦の性格因子は短3年が他の2校より低かった（ $P < 0.05$ ）（表3）。

### 3. 学生の主観的な看護に対するイメージの変化と記述された変化の内容

看護に対するイメージが入学時に比べ変化したとする学生は、短3年で70名（93.2%）、専修3年で42名（80.8%）、専修2年で19名（45.2%）であった（表4）。

変化の内容は、看護への理解・認識や意欲を表すポジティブな方向への変化が3校ともに記述件数の80%以上であった。ネガティブな方向への変化を示す記述は短3年5件、専修3年7件、専修2年2件であった（表5）。

ポジティブな方向への変化を示す記述は、「理論や根拠をふまえ、個別的な看護を提供することが重要」などの『看護観の明確化を表すもの』、「思った以上に楽な仕事ではないが、やりがいがある」などの『看護職の特性を表すもの』、「看護婦になりたいという気持ちが強くなった」などの『看護に対する態度を表すもの』の3カテゴリーに分類され、いずれの学校においても『看護に対する態度を表すもの』に属する内容の記述が半数以上であった（表6）。

ネガティブな方向への変化を示す記述は、

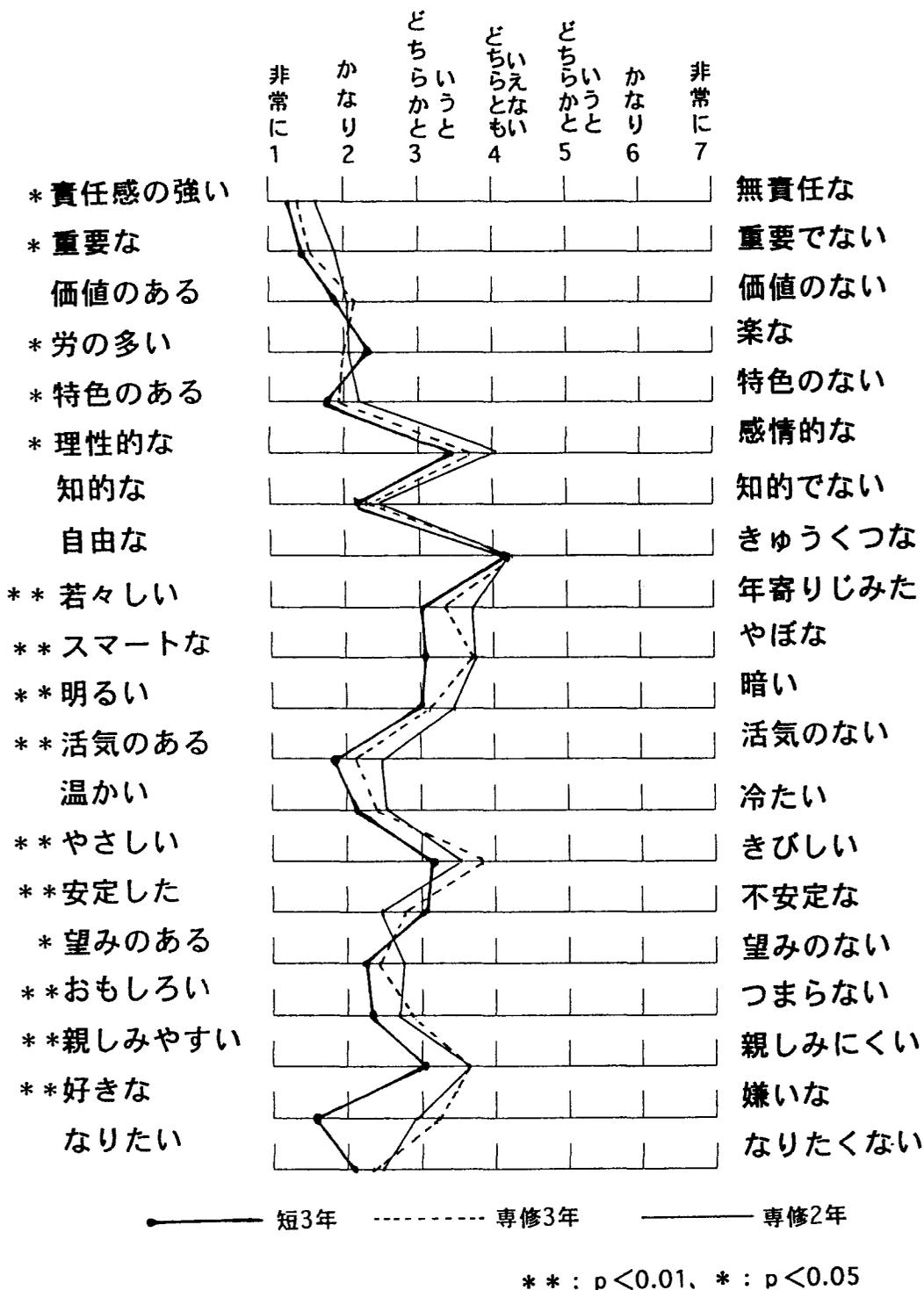


図1 看護イメージのプロフィール

表1 学校別の看護に対するイメージ

尺 度	短 3 年	専 修 3 年	専 修 2 年	t 検 定
	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	平均値±標準偏差	
責任感の強い	1.29 ± 0.51	1.44 ± 1.20	1.71 ± 1.07	*短3-専修2
重要な	1.46 ± 0.79	1.60 ± 1.24	1.93 ± 1.22	*短3-専修2
価値のある	1.94 ± 1.53	2.17 ± 1.32	2.12 ± 0.99	
労の多い	2.39 ± 0.88	2.04 ± 0.89	2.05 ± 0.96	*専修2・3-短3
特色のある	1.83 ± 0.77	1.98 ± 0.90	2.26 ± 1.06	*短3-専修2
理性的な	3.55 ± 1.39	3.77 ± 1.23	4.10 ± 1.14	*短3-専修2
知的な	2.14 ± 0.94	2.17 ± 0.99	2.52 ± 0.86	
自由な	4.25 ± 0.89	4.33 ± 0.94	4.24 ± 0.88	
若々しい	3.08 ± 1.04	3.37 ± 1.17	3.76 ± 1.03	**短3-専修2
スマートな	3.17 ± 1.06	3.73 ± 0.87	3.83 ± 0.79	**短3-専修2・3
明るい	3.00 ± 1.03	3.21 ± 1.16	3.52 ± 0.80	**短3-専修3
活気のある	1.96 ± 0.72	2.15 ± 0.89	2.50 ± 0.60	**短3-専修2
温かい	2.23 ± 0.89	2.44 ± 1.07	2.50 ± 0.97	
やさしい	3.23 ± 1.34	3.92 ± 1.33	3.52 ± 1.40	**短3-専修3
安定した	3.18 ± 1.06	2.79 ± 1.16	2.45 ± 0.83	**専修2-短3
望みのある	2.31 ± 0.91	2.44 ± 0.90	2.76 ± 1.08	*短3-専修2
面白い	2.44 ± 0.88	2.86 ± 0.73	2.69 ± 0.87	**短3-専修3
親しみやすい	3.04 ± 1.20	3.64 ± 0.99	3.64 ± 1.01	**短3-専修2・3
好きな	2.69 ± 1.10	3.31 ± 1.00	2.95 ± 1.06	**短3-専修3
なりたい	2.25 ± 1.17	2.37 ± 1.21	2.41 ± 1.21	

\* :  $p < 0.05$ , \*\* :  $p < 0.01$

表2 看護に対するイメージの因子構造

因 子 項 目		F 1	F 2	F 3	F 4	F 5
		看護就労 希望因子	看護の 価値因子	看護の 特性因子	看護婦の 外観因子	看護婦の 性格因子
なりたい	－ なりたくない	0.760	0.051	0.256	0.144	0.015
好きな	－ 嫌いな	0.597	0.170	0.040	0.201	0.026
望みのある	－ 望みのない	0.586	0.045	0.471	0.182	0.218
面白い	－ つまらない	0.449	0.189	0.145	0.298	0.049
自由な	－ きゅうくつな	0.438	-0.088	-0.124	-0.008	0.337
労の多い	－ 楽な	-0.269	0.055	-0.025	0.054	-0.096
責任感の強い	－ 無責任感な	0.003	0.937	0.011	0.050	0.101
重要な	－ 重要でない	0.047	0.779	0.150	0.117	-0.042
価値のある	－ 価値のない	0.247	0.303	0.057	0.244	0.092
特色のある	－ 特色のない	0.044	0.081	0.734	0.241	0.256
知的な	－ 知的でない	0.071	0.115	0.630	0.057	0.030
活気のある	－ 活気のない	0.149	0.256	0.344	0.336	0.129
安定した	－ 不安定な	0.166	-0.071	0.294	0.009	-0.245
明るい	－ 暗い	0.306	0.155	-0.023	0.571	0.256
若々しい	－ 年寄りじみた	0.075	-0.170	0.061	0.510	0.078
スマートな	－ やぼな	0.063	0.123	0.105	0.471	0.087
理性的な	－ 感情的な	-0.127	-0.050	0.173	0.470	-0.235
やさしい	－ きびしい	0.175	-0.046	0.120	0.005	0.460
温かい	－ 冷たい	0.268	0.017	0.375	0.291	0.440
親しみやすい	－ 親しみにくい	0.052	0.099	0.059	0.126	0.356
寄 与 率 (%)		23.7	10.1	8.8	8.2	7.0
累 積 寄 与 率 (%)		23.7	33.8	42.6	50.8	57.8

表3 因子得点の比較

因子 学校	F1 看護就労希望 因子	F2 看護の価値 因子	F3 看護の特性 因子	F4 看護婦の外観 因子	F5 看護婦の性格 因子
短 3 年	0.012	-0.142	0.023	-0.374	-0.336
専修 3年	0.159	-0.223	-0.200	0.144	0.307
専修 2年	-0.166	0.206	0.183	0.506	0.282

\*\* : P&lt;0.01, \* : P&lt;0.05

表4 主観的なイメージの変化

( ) : %

	変化した	変化しない	どちらとも いえない
短 3 年	70 (90.9)	6 (7.8)	1 (1.3)
専修 3年	42 (80.8)	9 (17.3)	1 (1.9)
専修 2年	19 (45.2)	19 (45.2)	4 (9.6)

「雑用が多くて仕事が業務的である」などの、『看護という職業に関するもの』、「やさしいというイメージだったが、それほどやさしくはない」などの、『看護婦像に関するもの』、「看護婦としてやっていく自信がなくなった」などの、

『看護に対する態度を表すもの』の3カテゴリーに分類され、『看護という職業に関するもの』に属する内容の記述が、いずれの学校にも多くみられた(表7)。

表5 変化の記述内容

	記述の 合計件数	ポジティブな 変化	ネガティブな 変化
短 3 年	7 4	6 9 (93. 2)	5 ( 6. 8)
専修 3 年	4 4	3 7 (84. 1)	7 (15. 9)
専修 2 年	1 7	1 5 (88. 2)	2 (11. 8)

表6 ポジティブな変化

カテゴリーと 記入例	記 述 数		
	短 3 年	専修 3 年	専修 2 年
1. 看護観の明確化を表 すもの  (記述例) ・理論や根拠をふまえ、個別的な看護を提供 することが重要。 ・知識や技術のほかに人間性が反映される。	1 5 (21. 7%)	1 2 (32. 4%)	5 (33. 3%)
2. 看護職の特性に対 する理解を表すもの  (記述例) ・思った以上に楽な仕事ではないが、やりが いがある。 ・きつくて嫌なことばかりではなく、楽しい ことも多い。	4 6 (66. 7%)	2 4 (64. 9%)	8 (53. 3%)
3. 看護に対する態度を 表すもの  (記述例) ・看護婦になりたいという気持ちが、強く なった。 ・看護をすることに自信を持てるようになり 現実の事として考えられるようになった。	8 (11. 6%)	1 ( 2. 7%)	2 (13. 4%)
総 記 述 数	6 9	3 7	1 5

( ) : 各群の総記述数に対する割合

#### Ⅳ. 考 察

卒業期の短大生・3年課程および2年課程の専修学校生の看護に対するイメージを調査した結果、SD法の結果にも因子得点の結果にも違いがみられた。短3年生は、SD法では最も好

意度の高いイメージであったが、因子得点では3因子で有意に低得点であった。逆に専修2年は、SD法では最も好意度の低いイメージであったが、因子得点では看護の価値で他の2校と、看護婦の外観因子と看護婦の性格因子で短

表7 ネガティブな変化

カテゴリーと 記述例	記述数		
	短3年	専修3年	専修2年
1. 看護という職業に関するもの  (記述例) ・雑用が多くて、仕事が業務的である。 ・求められることが多く、苦勞が付きない。 ・人間関係が難しく大変な仕事。	2	7	1
2. 看護婦像に関するもの  (記述例) ・やさしいというイメージだったが、それほどやさしくはない。	1	0	1
3. 看護に対する態度を表すもの  (記述例) ・看護婦としてやっていく自信がなくなった ・看護婦になることがこわい。	2	0	0
総記述数	5	7	2

3年と有意差がみられた。また、SD法で中間に位置していた専修3年は、因子得点では看護婦の性格因子で有意に高得点であった。これらの結果から、学校種別の特徴としては、短大生は看護に対して全体的に好意的・肯定的イメージを抱いているが、看護についてのみかたが明確化・固定化されたものに未だ形成されていないのではないかと考えられる。

専修学校生の場合はより現実を踏まえたみかたになっていると考えられ、専修3年は看護婦の性格的面を意識し、専修2年は看護の価値や看護婦の外観への拘りが強いものと察せられる。

学生自身の看護に対するイメージの入学時にくらべての主観的な変化については、変化したとする学生が短3年と専修3年では圧倒的多数であったのに対し、専修2年は半数以下であった。このことは、専修2年は准看護婦養成課程において既に何らかの具体的なイメージを抱いており、専修学校でそれらのイメージが変化した者が少なかったことを意味していると思われる。

ポジティブな変化の記述内容で、『看護職の特性に関すること』のカテゴリーに属する記述

が多かったのは、看護職に対する関心の強さや自分の職業として理解しようとする態度を示しているものと考えられる。

これまでの短大生と専修学校生を比較した同様の調査では、「専修学校生の方が看護に対して好意的・肯定的イメージを抱いており、専修学校生の方が看護婦を目指す目的意識が強いからではないか」と報告されている<sup>6)7)</sup>。今回の調査結果では、短大生の方が好イメージを示しているが、因子得点の比較では看護に対するみかたは他の2校より明確なものに形成されていないことが示された。このことについては、既報にあるように目的意識、アイデンティティの確立の程度の違いが関与していると考えられる。専修学校と短大では卒業後の進路にも違いがあり、卒業後直ちに臨床看護婦になることを目指す学生が圧倒的に多い専修学校生は、好意度の程度に関わらず、看護婦になることへの目的意識が明確になっているものと考えられる。一方、直ちに臨床看護婦になること以外の進路を選択する学生も比較的多い短大生では、看護には好意的であるが、「看護職者」としてのアイデンティティが他校の学生ほどに確立していないこ

とを示しているのではないかと推測される。

また、少数ではあるが看護に自信を持っていない学生もいることから、そのような学生の理解や指導の必要性も示唆されたといえる。

## V. 結 論

卒業期にある看護学生の看護に対するイメージについて、短大・専修学校3年課程・専修学校2年課程の学校の種類別に比較した結果、以下の結論を得た。

1. イメージプロフィールは、3校とも全体的に好意的イメージであるが、短3年が最も好イメージ寄り、専修2年が最も好意度が低く、専修3年は中間に位置していた。

2. 因子分析で5因子が抽出され、それらは『看護就労希望因子』、『看護の価値因子』、『看護の特性因子』、『看護婦の外観因子』、『看護婦の性格因子』であった。

3. 因子得点の平均値は、専修2年が『看護の価値因子』で他の2校より、『看護婦の外観因子』で短3年より有意に高く、『看護婦の性格因子』で短3年は他の2校より有意に低かった。

4. 学生の看護に対するイメージの主観的な変化としては、短3年・専修3年では変化した者が多かったが、専修2年では変化の有無に差はなかった。内容としては、ポジティブな方向への変化を表すものが3校とも記述件数の80%以上であり、『看護職の特性に関すること』のカテゴリーに属することが多かった。

## VI. おわりに

卒業期にある学生の看護に対するイメージの学校種別の特徴が、これまで報告されてきたことと若干の違いがあることが明らかになった。今後、大学生も含めた複数の学校についての検討や、縦断的調査による検討も行っていきたい。

## VII. 引用文献

- 1) K. E. ボウルディング, 大川信明訳: ザ・イメージ, 誠信書房, pp5. 1979.
- 2) 石塚百合子, 白佐俊憲, 木村泰子他: 看護婦イメージの研究, 看護教育, 23(7): 446~453. 1982.
- 3) 西幸子, 島村忠義, 村上美好他: 日本の看護学生と教育像(その1) —全国の看護学校の種別による比較を中心として—, 第11回日本看護学会集録(看護教育分科会), 12~19. 1980.
- 4) 島村忠義: 看護学生の意識と看護教育—全国調査の結果から—, 看護教育, 21(3), : 133~137. 1980.
- 5) 石井範子, 志賀令明, 戸井田ひとみ他: 看護学生の看護に対するイメージの変容について—基礎看護学見学実習前・後の比較—, 秋田大学医療技術短期大学部紀要 2: 91~92. 1994.
- 6) 2) と同じ
- 7) 3) と同じ